

①校舎北側のグラウンドで実施した6本のボーリングコアを対比した結果、西側の3本（No.1、No.3、No.4）と東側の3本（No.5、No.6、No.2）の間は地層が連続しない。

②No.2の下部の花粉分析結果では、他の試料では認められない亜寒帯の花粉が検出された。そのため、No.4を境に東側と西側では地層の地層対比が地表下20m付近より下位でできないことから、大きな層序のギャップ（標高の違い・堆積環境の違い・堆積時代の違い）がある。

③校舎北側のグラウンドで実施した6本のボーリングのうち、東側の3本（No.5、No.6、No.2）のボーリング位置の直北で実施したトレンチ調査の結果、27,500yBPの時代を示す有機質土層に断層の影響と考えられる地層の傾斜が認められた。

④①～③の理由により、断層は東側3本（No5、No6、No2）を含む範囲内で、ある程度の幅（ゾーン）を持って、分布している可能性が高い。

⑤体育館南側で実施したボーリング（No.7、No.8）の結果、2本の間において断層の影響と考えられる地層の傾斜が認められた。①～④の理由により、四條畷南中学校敷地内においては、敷地の東端部で南北方向の断層が連続している可能性が高い。この断層の位置は、既存資料の都市圏活断層図に描かれている断層の位置と調和的である。

⑥今後の敷地利用について、断層を跨いだ位置および断層近傍の施設は断層のズレによって壊れる可能性があるため、なるべく利用しないことが望ましい。また、新規施設の建設時にはできる限り断層から離れた位置に建設することが望ましい。ただし、敷地西側は断層の下盤側にあたり、地層が厚く堆積しており、全般的に地震波の増幅により強い揺れが生じやすくなるため、表層には軟弱な地層が分布するため、耐震性は十分に確保すべきである。

以上